高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第５集

チ シ 古 城 跡

高知西南地区大規模農道整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

１９９２・３

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター

チ　シ　古　城　跡

高知西南地区大規模農道整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

1 9 9 2・3

㈶ 高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

我が高知県は、県土の約80％を占める四国山地のため、古来より瀬戸内・近畿から隔絶された地域でした。

この高知を目指して、かつて先人たちが深山に分け入り、急峻な山を越え、その文化を運び、心を通わせた歴史の道は、小さな道から大きいものは南海道まで多様でした。

今日、南海道は県民の長く大きな念願でありました高知自動車道として現代に蘇り、また小さな道は国道・県道として整備、再編成され、現代の私達の生活に欠くことのできない存在となっています。

高知県では新しく開通しました高知自動車道を中核とする県下各地域の交通網の整備を進めています。この一環として、幡多地域の活性化の基盤整備として、高知西南大規模農道を建設することとなりました。大規模農道の路線上には中村市に所在するチシ古城跡が存在しており、協議の結果、止むを得ず記録保存しなければなりませんでした。

先人の足跡である貴重な文化財を現状保存できないでことは残念ですが、本報告書により、チシ古城跡が永く高知県の歴史上に記録されることを念じております。

最後に、この発掘調査にあたり種々御配慮、御協力いただきました関係各位に対しまして、ここに厚く御礼申し上げます。

平成4年3月31日

（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

所 長　小 橋 一 民

例　　言

1．本書は、高知西南地区大規模農道整備事業に伴うチシ古城跡の発掘調査報告書である。

2．チシ古城跡は、高知県中村市実崎字シロヤマ1407、チジ1359に所在する。

3．発掘調査は、平成3年11月5日～12月5日まで実施し、引き続き整理作業、報告書作成を行った。調査面積は、320㎡である。

4．調査は、高知県の委託を受け、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターが主体となって行った。発掘調査は森田尚宏（埋蔵文化財センター調査第2係長）の指導のもとに吉成承三（埋蔵文化財センター調査補助員）が担当し、事務は三浦康寛（埋蔵文化財センター主事）が行った。

5．本書の執筆・編集は吉成承三が行った。また、現場での測量には、江戸秀輝（埋蔵文化財センター調査員）の協力を得た。

6．調査にあたっては、高知県教育委員会、高知県幡多事務所農業課、中村市教育委員会、中村市文化財保護審議会委員、地元関係者に全面的な協力を得た。関係者各位に厚く御礼申し上げたい。

7．発掘調査には、作業員として下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

植恵・伊与田茂一・田所義三郎・布泰平・小笠原由夫・岡村章・福谷弘幸

田所洋子・福谷満子・松本菊美・山下初美

本報告書作成にあたっては、山中美代子、松木富子の協力を得た。

8．出土遺物及び調査資料は、（財）高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。なお、遺物の注記は、91－17ＴＣとしている。

報　告　書　要　約

1．遺 跡 名　チシ古城跡　　遺跡番号　070044　遺跡地図No．22－13

2．所 在 地　高知県中村市実崎字シロヤマ1407，チジ1359

3．立　　地　四万十川下流域右岸　丘陵端部　標高約38m

4．種　　類　中世城郭

5．調査主体　（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

6．調査契機　高知県西南地区大規模農道整備事業

7．調査期間　平成3年11月5日～12月5日

8．調査面積　320㎡

9．出土遺物　土師質土器，備前，青磁，近世～近代陶磁器

10．内容要約　チシ古城跡は、四万十川下流域右岸に立地する標高38.5mの中世の山城である。城跡としての形状は単郭で、現況では、詰、土塁状地形、腰曲輪状平坦面がみられたが、詰部は後世に小学校が構築されていたため攪乱が著しく、遺構は検出されなかった。詰北部に存在する土塁状地形についても、小学校構築時に造られたものと思われる。また、詰北東斜面部の腰曲輪状平坦面では、土師質土器、青磁、備前、土錘が出土した。城跡の築城年代、城主等は不明であるが、地検帳に、長宗我部氏家臣の光富次良兵衛の名をみることができる。光富次良兵衛は、山路城城主でもあり、長宗我部氏が検地を行った天正17年には、当城跡の所領も管理しており、この記載事実から、山路城跡との何らかの関連性がうかがわれる。立地的にみても両城跡とも四万十川下流の右岸に立地し、西から連なる丘陵端部に所在する事、また、二城の間は1.5kmと近接している事から考えて、チシ古城跡は、山路城跡の出城的な存在であった可能性が強い。さらに、出土遺物からみて15世紀後半～16世紀前半の一条氏配下の時代を中心とする城郭であったと考えられる。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査に至る経過 ---------- 1

第Ⅱ章　城跡の位置と歴史的環境 ---------- 3

第Ⅲ章　調査の概要 ---------- 5
1．城跡の概要 ---------- 5
2．調査方法 ---------- 5
3．詰A区 ---------- 5
4．詰B区 ---------- 6
5．C区 ---------- 9
6．D区 ---------- 9

第Ⅳ章　出土遺物 ---------- 18

第Ⅴ章　まとめ ---------- 20

挿 図 目 次

Fig.　1　中村市位置図 ---------- 1

Fig.　2　周辺の遺跡分布図 ---------- 2

Fig.　3　チシ古城跡位置図 ---------- 4

Fig.　4　調査区位置図 ---------- 7

Fig.　5　詰A区、C区、D区位置図 ---------- 10

Fig.　6　詰B区トレンチ位置図 ---------- 11

Fig.　7　詰A区バンクセクション、詰B区ＴＲ１～４セクション図 ---------- 13

Fig.　8　詰B区ＴＲ５～７、C区TR８・９セクション図 ---------- 15

Fig.　9　D区ＴＲ10セクション図 ---------- 17

Fig.　10　出土遺物実測図 ---------- 19

写 真 図 版 目 次

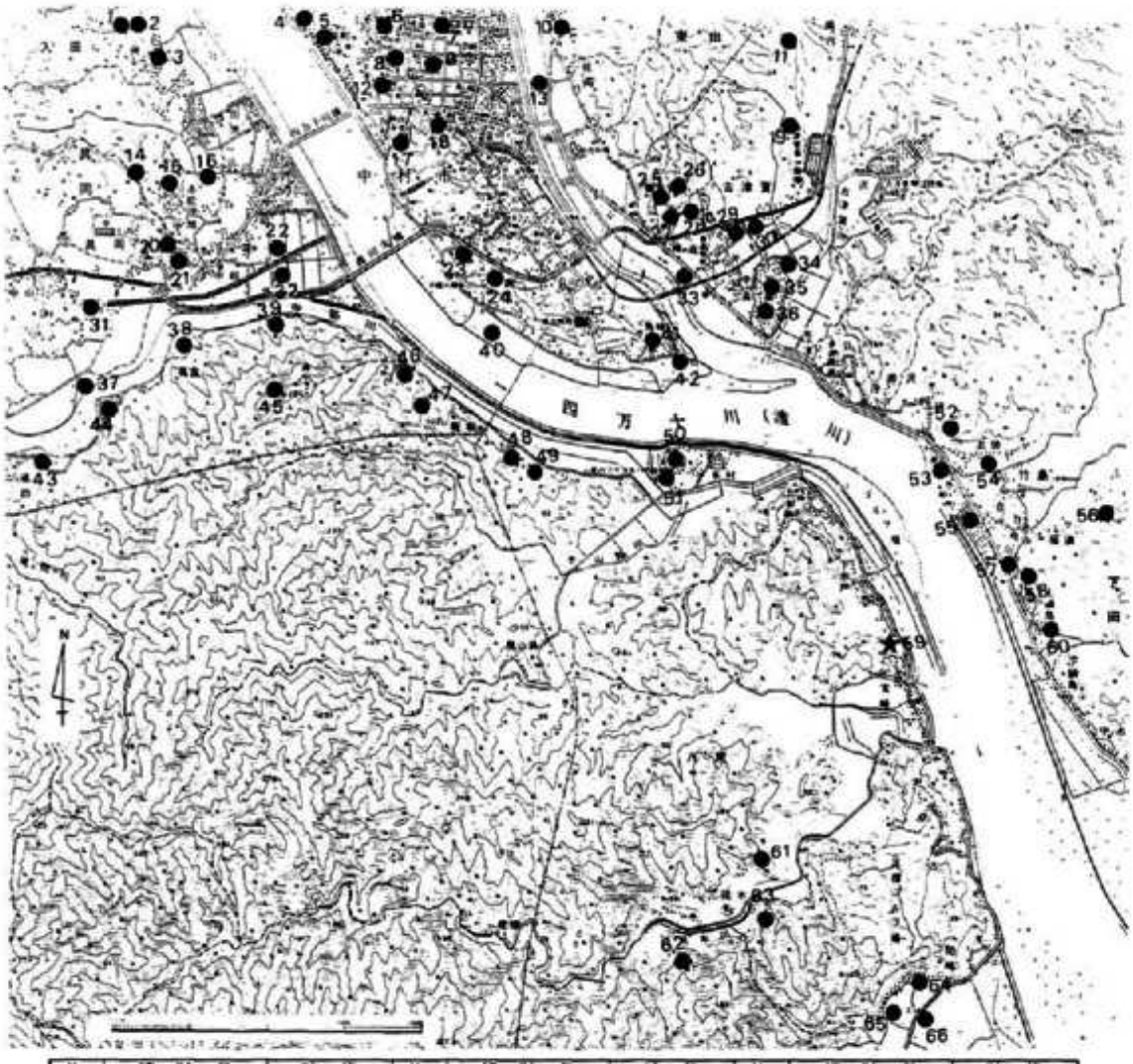
ＰＬ．１　調査地遠景（北より）---------- 23
〃　（東より）
ＰＬ．２　詰Ａ区調査前全景（西より）---------- 24
詰Ｂ区調査前全景（詰Ａ区より）
ＰＬ．３　詰Ａ区完掘状態（東より）---------- 25
〃
ＰＬ．４　詰Ａ区バンクセクション（西壁）---------- 26
〃　（南壁）
ＰＬ．５　ＴＲ１完掘状態（東より）---------- 27
ＴＲ２　〃　（南より）
ＰＬ．６　ＴＲ３完掘状態（東より）---------- 28
ＴＲ４　〃　（南より）
ＴＲ３セクション（北より）
ＴＲ５完掘状態（東より）
ＴＲ６　〃　（　〃　）
ＴＲ７　〃　（　〃　）
ＰＬ．７　ＴＲ８　〃　（　〃　）---------- 29
〃　完掘状態　（　〃　）
ＴＲ９調査前全景（東より）
〃　完掘状態　（西より）
ＰＬ．８　ＴＲ10調査前全景（詰Ａ区より）---------- 30
〃　完掘状態　（詰Ａ区より）
〃　（南より）
ＰＬ．９　詰Ｂ区発掘調査風景---------- 31
詰Ａ区発掘調査風景
調査風景
ＰＬ．10　出土遺物---------- 32

第Ⅰ章　調査に至る経過

近年、四万十川下流域における総合的開発が試みられ、四万十川の形態も大きく変貌しつつある。高知西南地区大規模農道整備事業は、高知県西南地域の基盤整備を行うことによって農業の活性化を図ることを目的とし計画された。計画では中村市内から四万十川に架橋し、三原村を抜け、宿毛市大月町方面へと続く広域農道を開通させるというものであった。高知県幡多事務所農業課は昭和60年、事業に着手したが本年度の工事部分である四万十川右岸の橋台部に周知の埋蔵文化財包蔵地であるチシ古城跡が存在していた。当事業の施工によって、現状は大きく変更され、埋蔵文化財も甚大な影響を受けることが必至となり、関係各機関で事前の協議が行われた。しかしながら架橋位置の変更は不可能であり、チシ古城跡の現状保存は困難と考えられ、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

発掘調査は、高知県教育委員会の指導により財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが県の委託を受け実施した。平成3年10月には調査の前段階として調査対象地の現地踏査を行った。その結果、丘陵頂部に詰と思われる郭状平担面があり、その北辺に東西に伸びる土塁状の地形を確認した。さらに、調査対象地南側斜面部に造られた畑地から北側斜面部に続く通路状の平担面及び北側斜面部に存在する段状平担面を確認した。平成3年11月5日より機材を搬入、発掘調査を開始した。調査には重機を使用したが、急峻な地形及び雑木等により非常に困難をきわめた。調査区設定においても、詰部分は現況の大半が蜜柑等の果樹畑であり、北東斜面には雑木が生茂り、それら樹木の間に調査区を設定せざるをえなかった。以上のような困難な状況ではあったが、調査は進められ平成3年12月5日には無事終了することが出来た。なお発掘調査面積は320㎡である。

Fig. 1　中村市位置図



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	秋トシ城跡	中世	23	不破城跡	中世	45	香山寺跡	中世・近世
2	秋トシ遺跡	弥生・中世	24	濃ノ谷城跡	〃	46	坂本遺跡	中世
3	長崎城跡	中世	25	観音寺遺跡	縄文	47	皇子山城跡	〃
4	吹越山遺跡	弥生	26	観音寺城跡	中世	48	サラガミネ城跡	〃
5	百天遺跡	平安・中世	27	古津賀サコヤシキ遺跡	〃	49	馬場谷遺跡	縄文・中世
6	古城山遺跡	弥生・奈良・平安	28	星野神社遺跡	〃	50	山路遺跡	弥生
7	玉姫の墓	中世	29	古津賀古墳	古墳	51	山路城跡	中世
8	一条教房墓	〃	30	オツケバ遺跡	〃	52	井沢城跡	〃
9	中村御所跡	近世	31	近沢城跡	中世	53	竹島城跡	〃
10	佐賀城跡	中世	32	永田遺跡	〃	54	白皇山古墳	古墳
11	古津賀岡田屋敷遺跡	〃	33	古津賀遺跡	古墳～中世	55	竹島遺跡	中世
12	中村具塚	縄文	34	オカノハナ遺跡	中世	56	福重古墳	古墳
13	佐岡遺跡	弥生・古墳	35	アミダ堂遺跡	〃	57	福満遺跡	中世
14	扇城跡	中世	36	宮田城跡	〃	58	鍋島遺跡	〃
15	ナリカド城跡	〃	37	具同中山遺跡群	縄文～中世	59	チシ古城跡	〃
16	田黒遺跡	〃	38	具重遺跡	古墳	60	上鍋島遺跡	〃
17	岩崎山遺跡	弥生	39	具重下遺跡	中世	61	岡崎ノ城跡	〃
18	羽生古城跡	中世	40	不破遺跡	〃	62	栗木城跡	〃
19	ササ山遺跡	〃	41	葛城々跡	〃	63	サコノ城跡	〃
20	栗本城跡	〃	42	角崎遺跡	古墳・中世	64	中西遺跡	縄文・中世
21	西和田遺跡	弥生	43	風指遺跡	弥生・平安・中世	65	ナカノ遺跡	奈良～中世
22	五反田遺跡	中世	44	アゾノ遺跡	中世	66	ナキリ遺跡	中世

Fig. 2　周辺の遺跡分布図

第Ⅱ章　城跡の位置と歴史的環境

中村市は高知県西部の拠点都市であり、幡多地方における政治・文化の中心的役割を果たしている。そして、四国第二の大河、四万十川とその支流後川・中筋川が造りなす平野部を市の中心とし、さらに幡多山地とも呼ばれる低丘陵部をも市域内に持っている。

チシ古城跡は、市の中心部から四万十川を南東に約8km下った実崎地区に位置し、四万十川と中筋川の合流点のやや上流、四万十川右岸にそびえる標高38mの丘陵端部に立地する。城跡からは、北方に中村市街地を一望でき、東方に四万十川を眼下に見下ろす絶好の眺望を持つ。

歴史的環境を見れば、縄文時代早期から後期にわたる遺跡として、大用・国見遺跡の存在が知られている。両遺跡からは、早期の尖頭状石器と石鏃が出土しているが、この時期の土器はまだ発見されていない。国見遺跡からは、中期の爪形文土器及び口縁部に沈線や列点文を入れた後期の土器の出土がみられる。さらに縄文時代後期の遺跡としては、勝間・三里の両遺跡がある。三里遺跡は四万十川中流の河岸段丘上に立地しており、遺構として炉跡が数ヵ所発見されている。時期は縄文後期中葉であり、石鏃類の出土は少ないが、漁業関係遺物である石錘の出土が多く、四万十川における漁労を物語っている。縄文時代晩期終末から弥生時代前期にかけては、幡多地方における弥生文化成立を示す遺跡として四万十川右岸に所在する入田遺跡が有名である。弥生時代中期後半に至ると、宿毛市大月町の竜ヶ迫ムクリ山に所在するムクリ山遺跡のように弥生系高地性集落の性格を持った集落が見られるようになる。また、中筋川下流域に立地する具同中山遺跡群においても若干ではあるが包含層中より弥生時代中期中葉から後葉にかけての弥生土器が出土している。

古墳時代に入ると、中筋川水系では宿毛市平田町に前方後円墳である平田曽我山古墳や高岡山古墳群など、4～5世紀代に位置付けられる古墳が造営されている。さらに中筋川左岸に位置する具同中山遺跡群では、5世紀後半から6世紀前半にかけての大規模な祭祀跡が発見されており、古くからの地域基盤を背景に文化流入の門戸として開かれていたと考えられる。また出土した須恵器の形態から見れば幾内との繋がりの上において中心的役割を果たしていた集落の存在が想定される。

古代の幡多郡の様相は、文献面のみならず考古学の面においても不鮮明であるが中筋川右岸に立地する風指遺跡の発掘調査によって平安時代中期の一様相が明らかになっている。

中世においては、まず幡多庄について若干述べなければならない。幡多庄は、蹉陀山古文書（金剛福寺文書）所収の嘉禎3年（1237）10月18日香山寺へ出された法橋某田地寄進状に「在土佐国幡多御庄本郷内」と記され、嘉禎3年にはすでに成立していた。また、「明月記」嘉2年（1226）10月12日条によれば、九条家領の荘園となった時期は、土佐が、九条兼実の知行国となった元久元年（1204）から、九条家の家司であった菅原為長が九条道家の勘気を被って「波多」を召し上げられた嘉禎２年の間と推定されている。いずれにしても幡多庄は建長２年

(1250) 11月には九条道家から一条実経へ譲られている。以後、幡多と一条家との結びつきが、戦国末期に土佐一条氏が滅亡するまで続いていくのである。中世において、一条氏が応仁の乱をさけて1468年に幡多庄中村へ下向する時期までの考古学的調査は少ないが、香山寺の川平山中世墓地群の発掘調査とアゾノ遺跡の発掘調査が行われている。川平山中世墓地群では、墓壙から備前Ⅲ期の壺及び和泉型と考えられる瓦器椀が出土していることから、13世紀後半から14世紀に形成されたと考えられる。アゾノ遺跡では13世紀後半から14世紀前半頃の東播系須恵器及び14世紀初頭から14世紀前半の瓦器皿の出土がみられる。また、アゾノ遺跡では1498年の南海地震の影響によると考えられる噴砂が発見されており、南海大地震周期説を確認するうえで貴重な資料となっている。

一条氏は、幡多庄へ下向以後公家大名として発展し、さらに荘園内の土豪を支配下に組み入れることにより荘園領主から武力を背景とした戦国大名へと勢力を伸ばした。この時期以降になると、今回調査が行なわれたチシ古城跡や栗本城跡・中村城跡等の中世山城が爆発的に増加しており、昭和62年度に実施された分布調査の段階では中世城跡の占める割合が56％と高い数値を示している。一条氏時代の終焉以後、長宗我部氏・山内氏へと時代は変遷していくが、中村城跡・栗本城跡・塩塚城跡・扇城跡等の発掘調査が行なわれており、徐々にではあるが幡多地域における中・近世の実態が考古学的に解明されつつある。

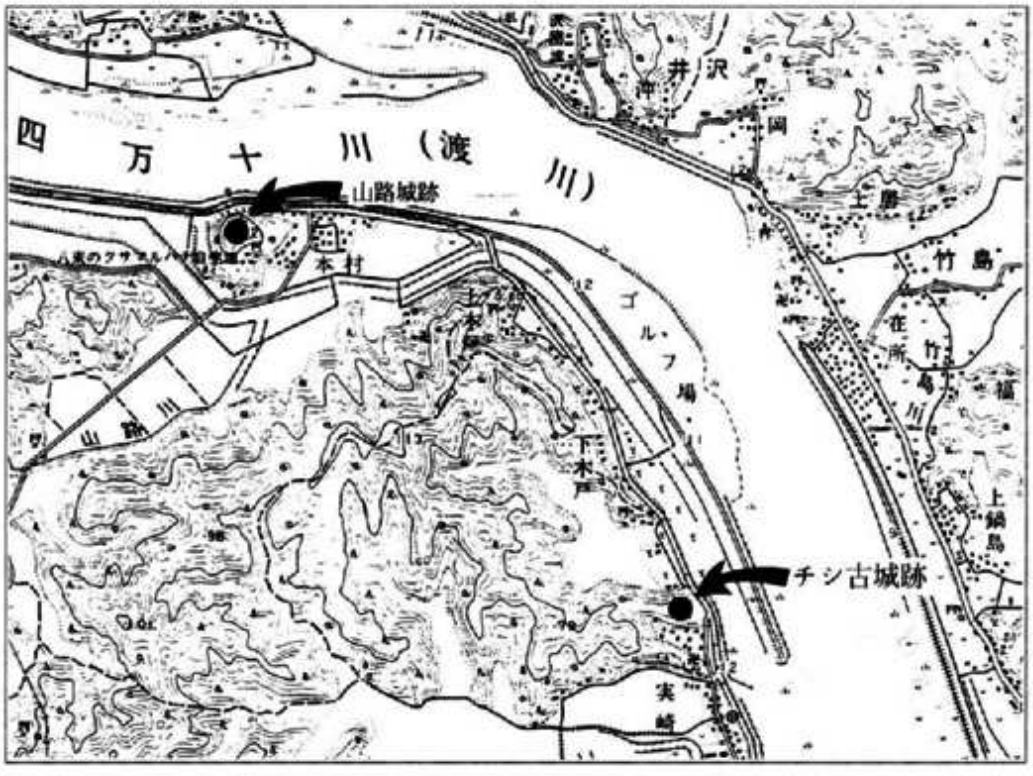


Fig. 3　チシ古城跡位置図

第Ⅲ章　調査の概要

１．城跡の概要

チシ古城跡は、中村市実崎字シロヤマ1407、字チジ1359に所在する。標高36mの山頂部には長さ70m、幅35mで幅狭く細長い平担地形を呈した詰部が存在し、詰部の東端部には城跡が機能していた時期の残存部と思われる半月状の平担面があり、詰部北辺には詰部との比高差2.5m、東西45mの長さを持つ土塁状の地形が存在する。また北側斜面部には詰との比高差4～６mで段状の平担面が見られる。さらに南側斜面部に段状に造られた畑地から北東斜面部に至るまでには、詰との比高差3～５mの腰曲輪状の平担面が続いている。城跡としての形状は単郭であり、地目は畑地、果樹畑になっている。

２．調査方法

工事対象区域は丘陵の北半部を中心としており、大規模に掘削する計画であった。さらに、城跡自体も山城という性格から斜面部も含め、調査区域は広範囲に及んだ。しかし、北側斜面部は急傾斜のため調査区を段畑部分に限定して調査を行なった。詰部分の調査にあたっては、東端部の標高38.5mを測る半月状の平担面を詰Ａ区とし、中央部の平担面を詰Ｂ区と呼称することとした。詰Ｂ区には、大正から昭和の初めにかけて小学校が存在しており、平担面自体は小学校建設時にその大部分が削平されている可能性が大であった。そのため詰Ｂ区の現況からみる限り、城跡としての状況を知ることは困難であった。しかしながら詰Ａ区は、詰Ｂ区から比高３mを測り、その形状から見れば、城跡の原型を残すものと考えられ、調査結果が期待された。なお、現況は詰Ａ区が畑地であり、詰Ｂ区は蜜柑等の果樹畑である。

以上の状況から、調査方法として詰Ａ区は全面調査を実施し、詰Ｂ区は樹木の間に任意のトレンチを設定することにより、遺構・遺物の検出に努め、検出された場合には全面発掘を行なうこととした。さらに、北側斜面部の段畑をＣ区、北東斜面部の平担面をＤ区とし、各々、畑地と平担面に任意のトレンチを設定し、調査を実施した。トレンチは詰Ｂ区に7ヵ所（ＴＲ1～7）、Ｃ区に2ヵ所（ＴＲ8・9）、Ｄ区に1ヵ所（ＴＲ10）とした。

なお、調査にあたっては重機を使用し、耕作土を除去した後、人力により遺構及び遺物包含層の検出作業を土層観察と並行させて実施した。詰Ａ区については、従前の地形測量図では詳細な状況が不明であったので調査前の地形測量（縮尺1／100）を行い、城跡としての現況把握に努めた。

３．詰Ａ区

調査対象地の東端部に残存する郭状平担面に設定した調査区である。基準点ＴＰ1とＴＰ2を結ぶラインを基準線とし、４mのグリッドを展開した。基準線の方向は、Ｎ－74°－Ｅであ

る。表土を除去した段階で、岩盤が現われ、さらに精査を行なったが全面にわたり表土下は岩盤であることが判明した。岩盤上には柱穴等の遺構も見られず表土との間にも遺物包含層と考えられる層序は確認できなかったが、表土中からは土師質土器の細片が出土しており、詰A区自体が後世に削平等の改変が行なわれたと見るよりも、比較的原形をよく残しているものと考えられる。なお、畑地の中央部に70～80㎝大の岩が、数個存在していたが、表土中に置かれたものであり、城跡に関係する配石とは認められなかった。調査面積は120㎡である。

4．詰B区

詰B区には、ＴＲ1～ＴＲ7を設定し調査を行なった。ＴＲ1・2は詰B区のはば中央部に東西20m、南北12m、幅2mで十文字に設定した。ＴＲ3～ＴＲ7はその周辺部に樹木をさけ任意に設定した。トレンチの配置からみて西部はやや少ないが、ほぼ全域にわたって調査を実施することができた。調査面積は156㎡である。

ＴＲ1

ＴＰ1とＴＰ4を結ぶラインを基準線とし、幅2m、長さ20mで設定したトレンチである。基本層序は、第Ⅰ層灰褐色土層の耕作土のみで、地山は灰白褐色を呈した岩盤風化土である。トレンチ東端部には堆積厚30～40㎝の攪乱層が存在する。遺構及び遺物は検出されなかった。

ＴＲ2

ＴＲ1と直交する、幅2ｍ、長さ12mのトレンチである。ＴＲ1と同様に第Ⅰ層灰褐色土層の耕作土のみで、地山は灰白褐色を呈した岩盤風化土である。地山はやや南方に向って傾斜している。遺構及び遺物は検出されなかった。

ＴＲ3

詰B区の南西部に、境界線に沿って樹木の間に設定した幅2m、長さ24mのトレンチである。層序は、第Ⅰ層灰褐色土層の耕作土のみで地山は灰白褐色を呈した岩盤風化土である。地山は西方に向かって緩やかに傾斜している。遺構及び遺物は検出されなかった。

ＴＲ4

詰B区の果樹畑部分に南北18m、幅2mで設定したトレンチである。層序は第Ⅰ層灰褐色土層の耕作土のみで、地山は灰白褐色を呈した岩盤風化土である。地山は南方に向かって緩やかに傾斜している。遺構及び遺物は検出されなかった。

ＴＲ5

詰B区のやや北西よりに設定した2ｍ×2ｍのトレンチである。層序は第Ⅰ層灰褐色土層、第Ⅱ層暗灰褐色土層、第Ⅲ層暗黄褐色土層である。第Ⅰ層は耕作土で、第Ⅱ層は地山である。第Ⅲ層は礫（3～5㎝大）が混入した攪乱層である。遺構及び遺物は検出されなかった。

ＴＲ6

詰B区の西端部に設定した2ｍ×2ｍのトレンチである。層序は第Ⅰ層灰褐色土層で、地山

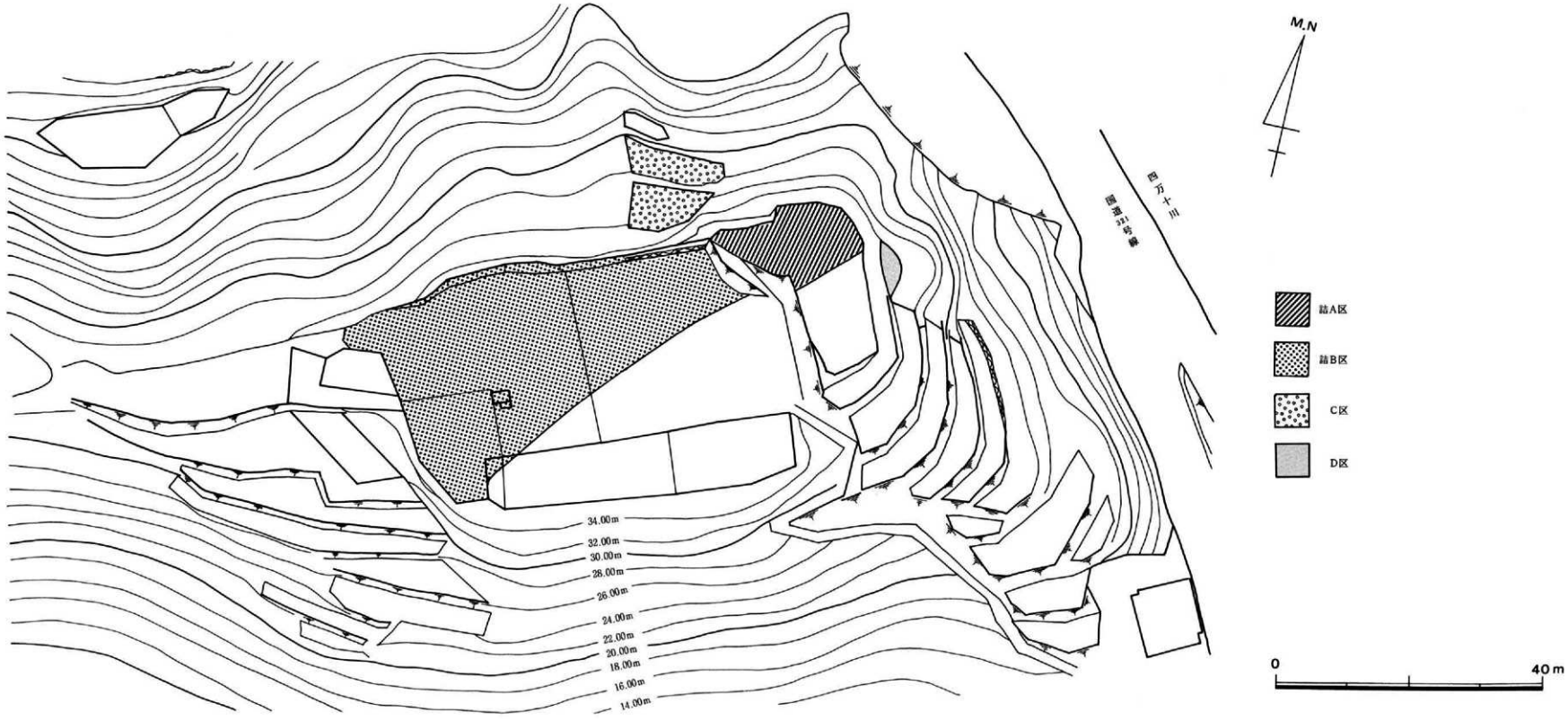

M.N
西万十川
国道321号線
34.00m
32.00m
30.00m
28.00m
26.00m
24.00m
22.00m
20.00m
18.00m
16.00m
14.00m
結A区
結B区
C区
D区
0
40m

Fig. 4　調査区位置図

はやや赤味を呈した黄褐色土である。遺構及び遺物は検出されなかった。

ＴＲ７

詰Ｂ区の果樹畑のほぼ中央部に設定した2ｍ×2ｍのトレンチである。層序は第Ⅰ層灰褐色土層で、地山は礫（3～5cm大）を含む黄褐色土である。遺構、遺物ともに検出されなかった。

５．Ｃ区

詰Ｂ区の北側斜面部である段畑にＴＲ８・９を設定し、調査を行なった。ＴＲ８・９共に畑の長軸方向に幅2ｍ、長さ8ｍのトレンチを設定した。調査面積は32㎡である。

ＴＲ８

Ｃ区上段の畑地に設定したトレンチである。層序は、第Ⅰ層表土で暗褐色土層、第Ⅱ層明褐色土層、第Ⅲ層暗黄灰褐色土層で地山土である。地山は西側に向かって傾斜角15°で傾斜している。第Ⅰ層及び第Ⅱ層中から、近世～近代の陶磁器片が出土した。トレンチ東部分は、堀状の落ち込みを呈していたが、土層の堆積状態から判断して自然地形であると考えられる。

ＴＲ９

Ｃ区下段の畑に設定したトレンチである。層序は、第Ⅰ層表土で暗褐色土層、第Ⅱ層暗黄褐色土層、第Ⅲ層灰褐色土層、第Ⅳ層明黄褐色土層、第Ⅴ層暗灰褐色土層で地山土である。第Ⅰ層及び第Ⅱ層中より近世～近代にかけての陶磁器片が出土した。地山はＴＲ8と同じくトレンチ中央部より東側に向かって落ち込み、東端部でやや上方に上がる掘状を呈しているが、土層の堆積状況から判断して自然地形であろう。

６．Ｄ区

詰Ａ区から比高差5.5mを測る北東斜面部の平担面にＴＲ10を設定し調査を行なった。すでに斜面部には岩盤が露頭しており、斜面部に直交する形で幅1ｍ、長さ4ｍのトレンチを設定した。詰Ａ区からの斜面の傾斜角は60°を測る。調査面積は4㎡である。

ＴＲ10

Ｄ区の腰曲輪状平担面に設定したトレンチである。層序は、第Ⅰ層表土の暗灰褐色土層、第Ⅱ層は暗黄褐色土である。第Ⅱ層暗黄褐色土層中より、土師質土器細片2点、青磁3点、備前甕片2点、土錘1点が出土した。地山は砂岩質の岩盤であり、トレンチ中央部には同じ砂岩質の岩が露頭しているが遺構は確認出来なかった。第Ⅱ層は出土遺物からみれば当城跡の包含層とみられ、詰部分には存在しないが、斜面部には流入し、堆積が残っているものと考えられる。

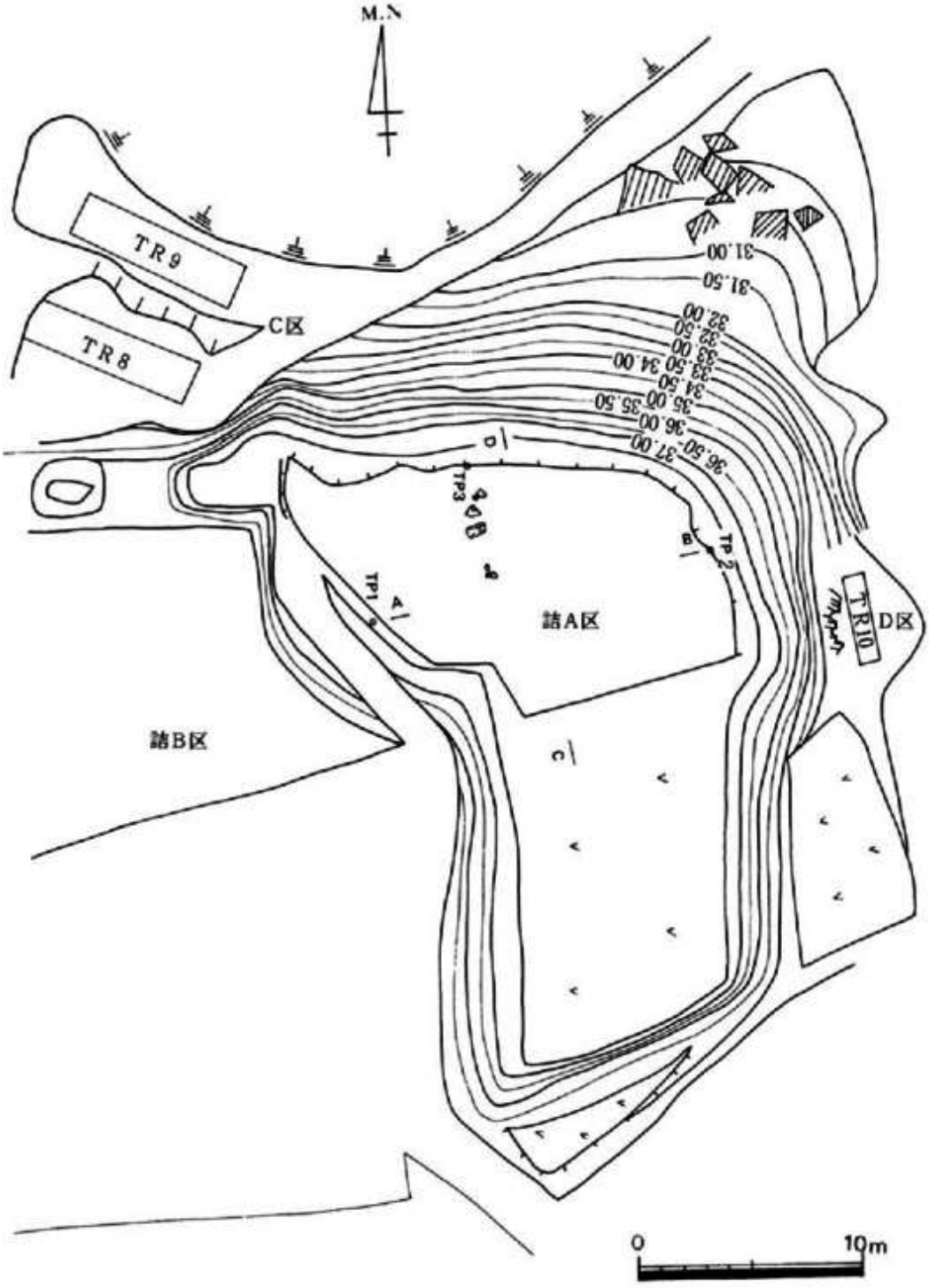


Fig. 5　詰A区，C区，D区調査区位置図

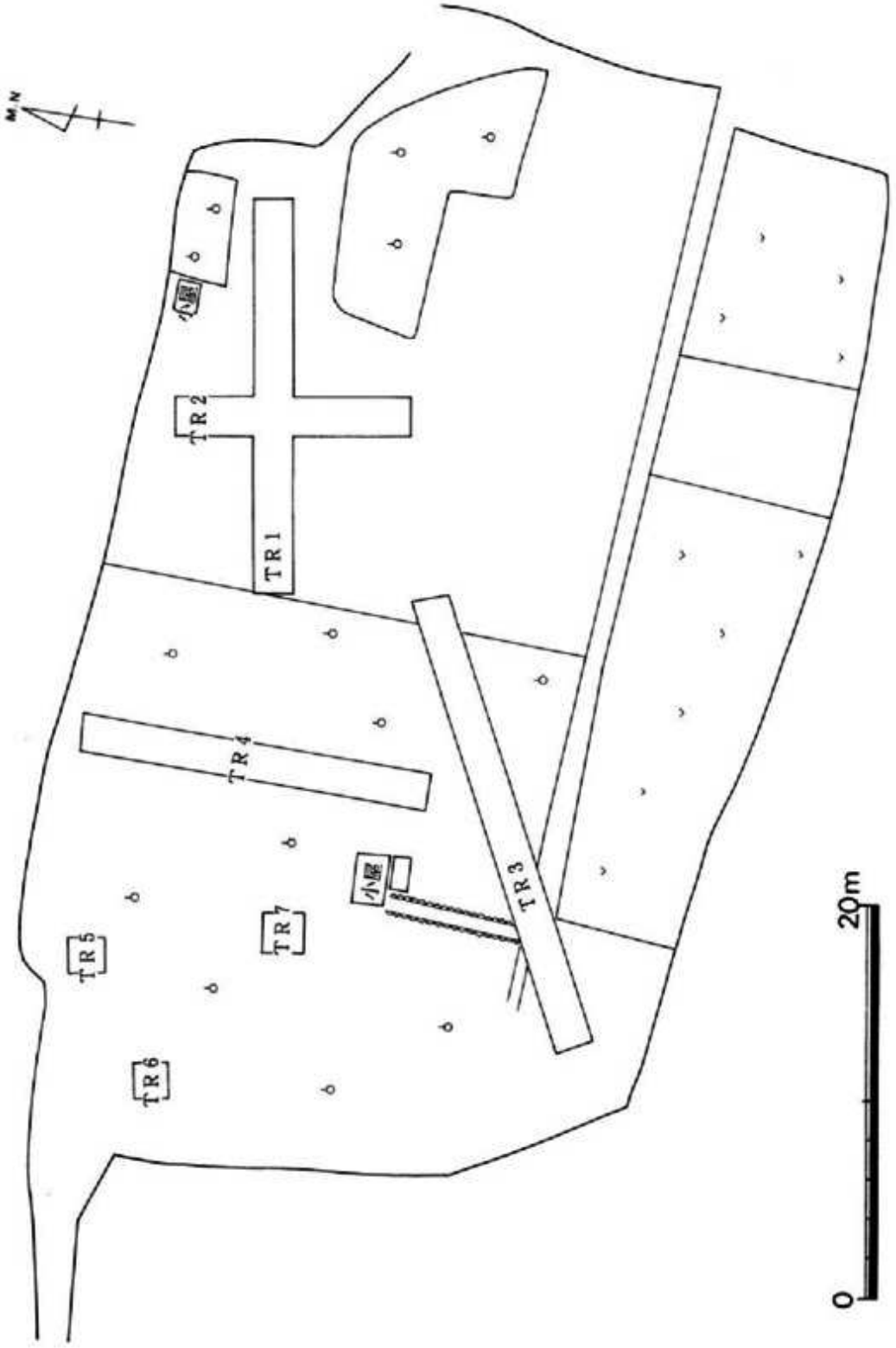


Fig. 6　詰B区　トレンチ位置図

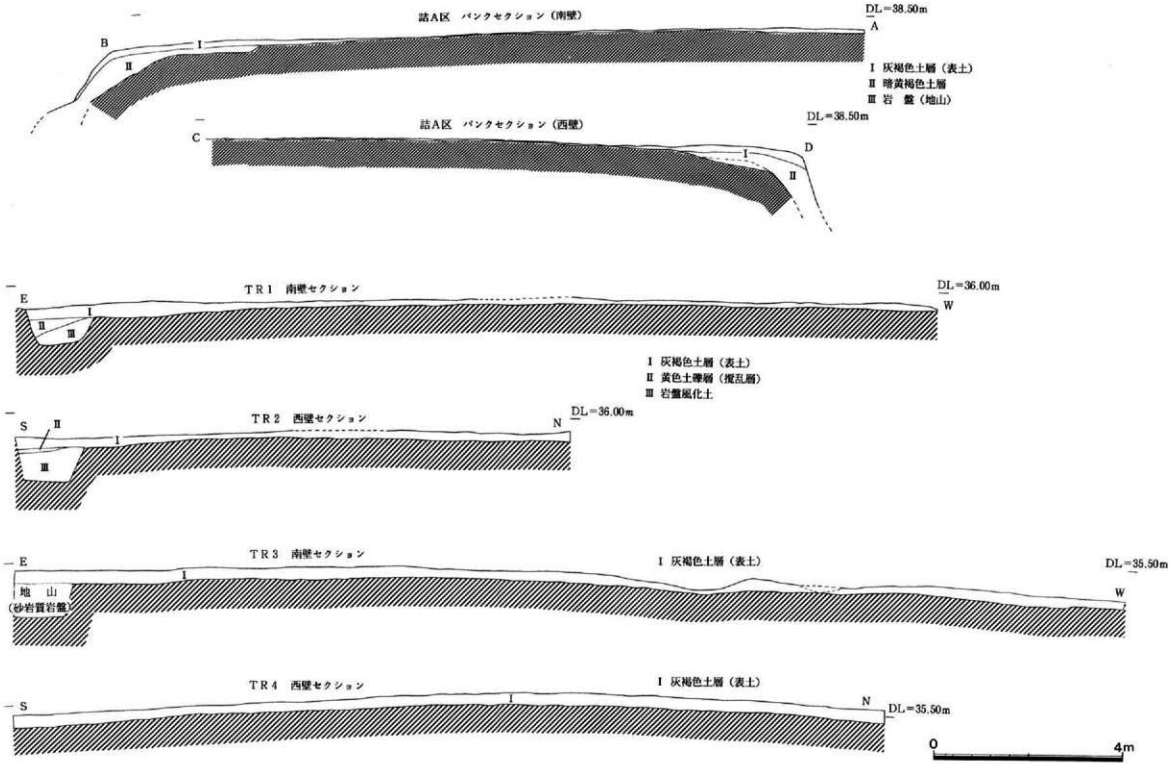


Fig. 7 詰A区 バンクセクション、詰B区 TR 1～4セクション図

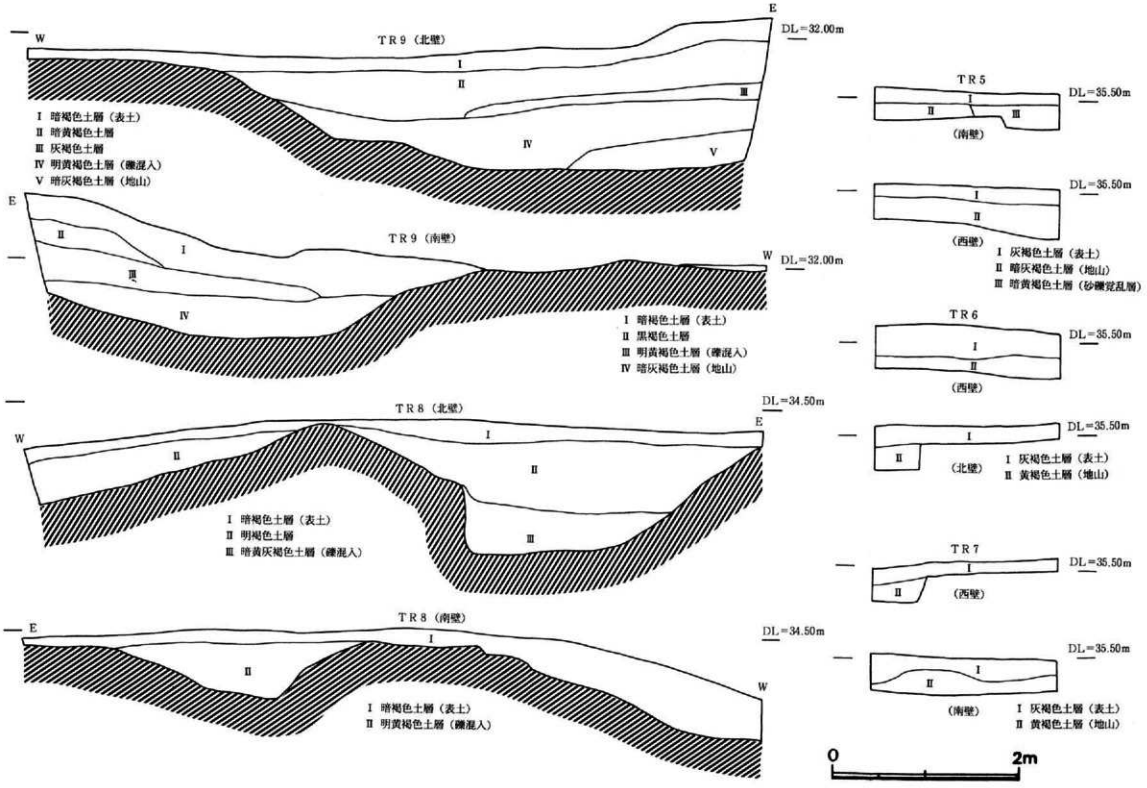


Fig. 8 詰B区 TR5～7、C区 TR8・9セクション図

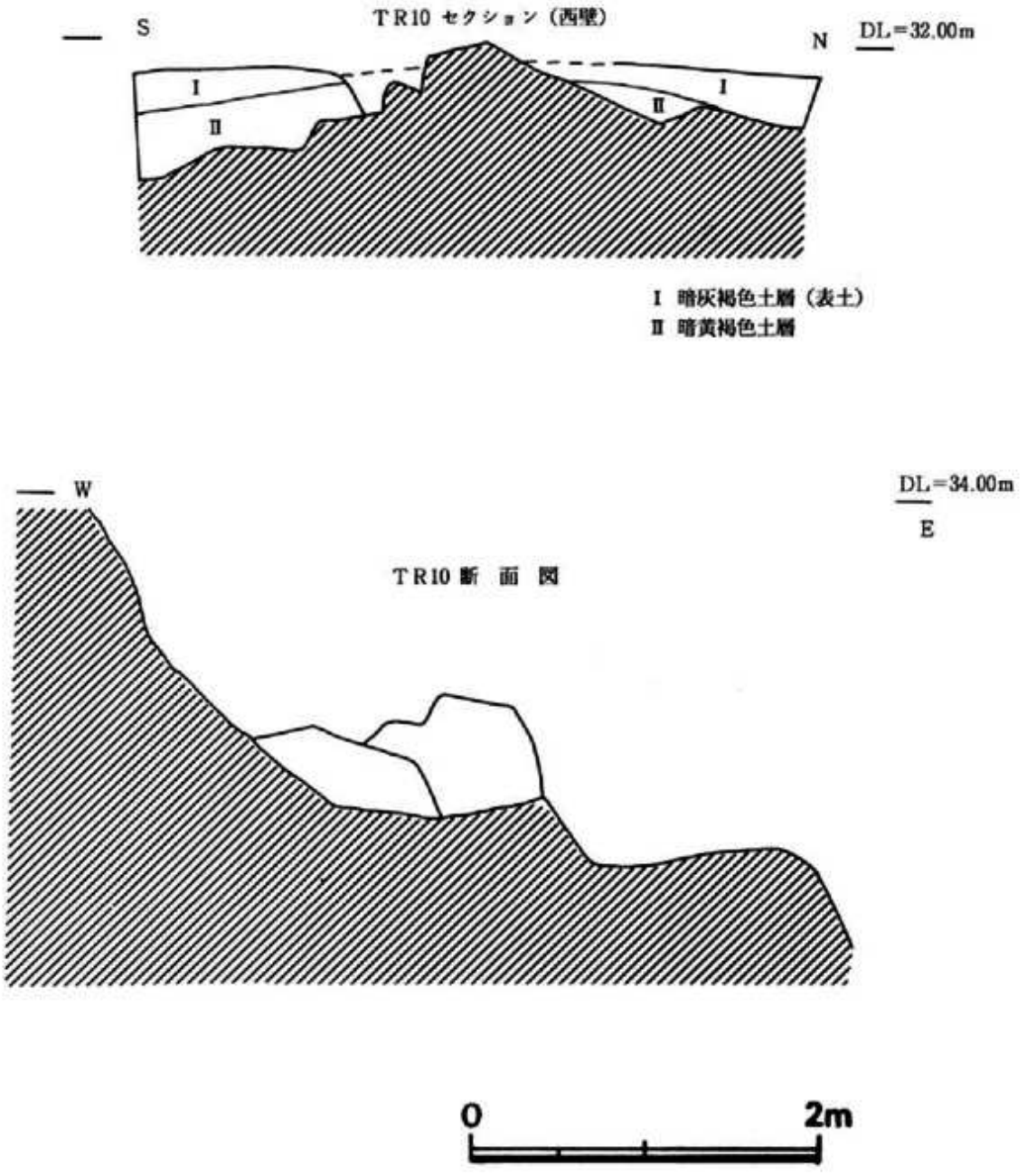


Fig. 9　D区 TR10セクション図

第Ⅳ章　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、総点数約100点余りで、内訳は、土師質土器、備前、青磁、近世陶磁器等であるが、その出土量はあまり多くなかった。中では土師質土器が比較的多く見られたが、そのほとんどが細片であり、磨耗を受けているため、実測可能な土器片は僅かであった。出土遺物の大半は、詰Ａ区の北東担部から比高差5.5mの斜面に設定した発掘区ＴＲ10から出土したものであり、詰Ａ区からは約20点の土師質土器の細片が出土したのみである。詰Ｂ区に設定したＴＲ1～ＴＲ7からの出土遺物は皆無であり、詰Ｂ区北側斜面のＣ区に設定したＴＲ8・ＴＲ9については近世～近代の陶磁器片が約70点ほど出土した。

土師質土器　(Fig.10－1・2)

土師質土器は、詰Ａ区第Ⅰ層中から約20点、ＴＲ10第Ⅱ層中から2点出土した。1はＴＲ10第Ⅱ層中から出土しており、杯の底部片である。底径6.4cmを測り、色調は黄橙色を呈する。全体的に軟質で胎土には砂粒を含まない。2もＴＲ10第Ⅱ層中からの出土であり、小杯の底部片である。底径3.2cmを測り、色調は橙色を呈する。やや軟質で胎土には砂粒を含まない。底部外面には回転糸切り痕が残る。

青　磁　(Fig.10－3～5)

3はＴＲ10第Ⅱ層中から出土の稜花皿である。底径5.6cmを測り、内面見込み部には印花文が施され、高台外面は斜めに削っている。全体的に貫入が入っており、オリーブ灰色を呈し、高台内面まで施釉されている。口縁部は欠損しているが、腰折れ形態で、腰部から大きく外反する。4は碗であり、外面にヘラ描きによる細蓮弁文が施されるが、細線と剣頭による蓮弁は単位にやや乱れを生んでいる。口径14.2cmを測り、釉は緑灰色を呈し、内外面に貫入が見られる。5も碗であり、内面には丸ノミ状工具による菊花状の線彫りが施され、外面には花文が見られる。口径8.6cmを測る。3・4・5ともにＴＲ10第Ⅱ層中からの出土である。

備　前　(Fig.10－6・7)

6は甕の胴部破片である。外面はやや赤味を帯びた灰褐色を呈し、器厚は1.2cmを測る。内外面ともにナデ調整が施されている。7も甕の胴部破片であり外面にナデ調整が施される。赤褐色を呈しており、器厚は1.3cmを測る。

土製品　(Fig.10－8)

8は土錘である。形状は紡錘状を呈しており一端を欠損する。全長3.3cm、全幅1.4cm、孔径0.4cm、全量4.8ｇを測る。色調はにぶい橙色を呈する。

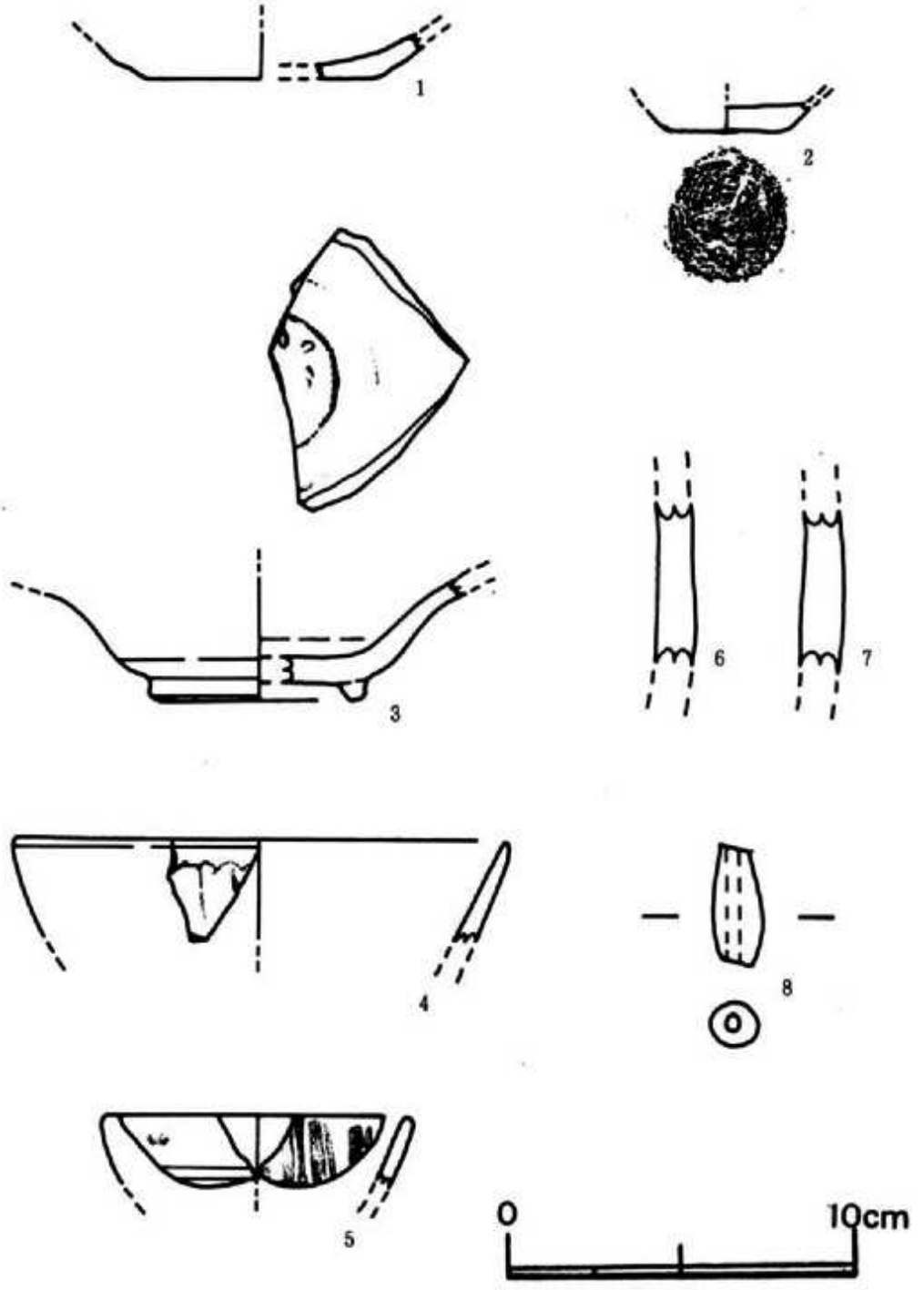


Fig. 10　出土遺物実測図

第Ⅴ章　まとめ

今回の発掘調査では遺構は検出されなかったが、出土遺物からみて、詰Ａ区はチシ古城跡の一部を示すものであることが確認された。しかし、詰Ｂ区の郭状平担面は大正時代に小学校が建てられていたため、その大部分が大きく削平されており、遺構、遺物の残存状況はきわめて不良であった。削平以前の旧地形を残すと考えられる詰Ａ区であるが、開墾を受けているため、表土直下に地山が検出されている。発掘区中央部に数個の配石が存在したが、調査の結果、城跡にかかわる遺構とは考えられなかった。詰Ｂ区は、小学校跡地の部分で詰Ａ区から比高差約3mをもって大きく削平されており、北辺には、土塁状の地形が残存していた。土塁状地形は途中で切られており、土層断面の観察によれば小学校建設時に構築されたものと考えられる。平担部のトレンチ調査を行なったが、いずれのトレンチも現況の畑の耕作土を剥ぐと風化した地山が見られ、遺物、遺構は検出されなかった。

北側斜面部に設定したＴＲ８・９についても、当初竪掘状の落ち込みが見られたが、土層の堆積状態を確認しながら調査を進めた結果、自然地形であることが判明した。北東斜面部では、通路状の平担面が広がっており、ＴＲ10を設定し調査を行ったが、遺構は検出されなかった。斜面には岩盤が不規則に露頭し、調査対象地南側に畑が作られている現況等から見れば、自然地形を利用し、近年に造られた通路と考えられるが、詰部を廻ることから見れば、城跡の遺構として、小規模な腰曲輪が存在していた可能性も残されている。またＴＲ10からは、第Ⅱ層暗黄褐色土層中からの遺物の出土が確認されたが、土層の堆積状態等から判断して、上部の詰からの流れ込みと考えられる。

出土遺物は、土師質土器、青磁、備前、土錘であり、詰A区とＴＲ10の第Ⅱ層暗黄褐色土層から出土したものである。土師質土器については、破片であるため時期を判断するのは難しいが、青磁については、その形態及び成形技法上の特徴から、15世紀後半～16世紀前半にかけてのものと考えられる。備前についても破片ではあるが、出土した青磁と同時期のものと考えられる。また、各調査区の表土層からは、近世～近代にかけての陶磁器も出土しているが、19世紀代の物が多くみられ、江戸時代後半から明治時代にかけて城跡の段状平担地を利用した耕作が盛んに行われたことがうかがわれる。

当市域では、天正17年（1589）の10月～11月に長宗我部氏の検地が行われているが、この検地の実施までに一条氏配下の所領は一掃され、長宗我部氏の家臣たちに分与されて所領の再編成が行われている。長宗我部氏は、天正2年2月に一条兼定を豊後へ追放したのち幡多を支配下にするが、この際、服従しない旧一条家家臣は全所領を没収され帰農・逃散したものが多い。止むなく臣従した旧一条家家臣に対しては、旧領を没収し監視がついた不便な地を与えて長宗我部氏の直轄地にしている。当城跡が存在する四万十川右岸や、中筋川流域でも旧一条家家臣で本領を安堵されたり、地替されて長宗我部氏に臣従した者の所領が大半を占めている。

地検帳によれば、幡多庄深木村真崎村のホノギに「同所（チシ）上山スゝレ」「同所の北」「チシ古城ノ東ウラ道ノ下川縁」とあり、これらの下畠・下ヤシキは長宗我部氏家臣である光富次良兵衛の所領であると記されている。また、「同所南□□古帳ニナシ　旧山路分　川窪甚兵衛□」と記載されているが、旧山路分とは、山路氏の所領であったところである。山路氏は、旧一条家家臣であり、山路城の城主であった人物である。このことから、「古帳」というのは、旧一条氏の統治下に行われた検地の記録と想定される。山路城跡は、当城跡から西北方向に約1.5km離れた山路村に立地し、四万十川と山路川の合流点にそびえる標高約60mの山城である。発掘調査は行われていないが、詰・土塁（詰の東、北、西）・堀が残されている。山路村は、一条氏家臣山路氏の本拠地で、検地当時も山路右京亮が屋敷を構えているが、長宗我部氏の配下になってからは具同村に本拠を移している。後に、山路城跡の城主は、長宗我部元親の妹の婿である波川玄蕃、さらに光富次良兵衛へと代わっている。地検帳の山路村をみると、「自是城屋敷」として「今城」「ベイノタン」「西ニノヘイ」「安田ノタン」「大門ノ下」「詰」「三ノ塀」等のホノギをあげ、計10ヵ所の屋敷、城屋敷が記載されており、これらは、中山新兵衛・光富次良兵衛・宮地平衛尉など長宗我部家臣の給人に居屋敷として分与されている。この記載にみられる光富次良兵衛は、前述の地検帳真崎村にその名をみることができるが、チシ古城跡にも所領を与えられている長宗我部家臣の給人である。これらの記載事実から、検地が行われた天正17年には、当城跡はすでに古城となっており、城郭として機能していたとは考えがたいが、長宗我部氏が、旧山路氏の所領を後に、山路城城主であり長宗我部家臣の光富次良兵衛に管理させて直轄地にしていたことがうかがわれる。さらに、出土遺物からみて15世紀後半～16世紀前半の一条氏配下の時代を中心とする城郭であったと考えられる。また立地的にみて、両城跡とも四万十川下流の右岸に立地し、西から連なる丘陵端部に所在する事、二城の間は1.5kmと近接している事から考えて、チシ古城跡は、山路城跡の出城的な存在であった可能性が強い。

以上、今回の調査結果、地検帳などから推察できることを述べてきたが、現時点では文献等の資料も数少なく、チシ古城跡の全体像解明には至らなかった。しかしながら、チシ古城跡の位置、山路城跡との関連性及び城跡と出土遺物との関係からみれば、幡多における中世城郭の有機的な構造の一端を垣間見ることができた。今後、周辺の中世山城の発掘調査によって研究の進展を期待する次第である。

参考文献

『長宗我部地検帳　幡多郡　中』 幡多庄山路村・幡多郡深木、真崎村

中村市史編纂室 『中村市史』 中村市　1969・11

松田直則・出原恵三 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』 高知県教育委員会　1989・3

『角川日本地名大辞典』 角川書店　1986・3

『高知県の地名』 平凡社　1983・10

図　　版

調査地遠景（北より）

調査地遠景（東より）

詰A区調査前全景（西より）

詰B区調査前全景（詰A区より）

詰A区完掘状態（東より）

詰A区完掘状態（東より）

詰A区バンクセクション（西壁）

詰A区バンクセクション（南壁）

ＴＲ１完掘状態（東より）

ＴＲ２完掘状態（南より）

ＴＲ３完掘状態（東より）

ＴＲ４完掘状態（南より）

ＴＲ３セクション（北より）

ＴＲ５完掘状態
（東より）

ＴＲ６完掘状態
（東より）

ＴＲ７完掘状態
（東より）

ＴＲ８調査前全景
（東より）

ＴＲ８完掘状態
（東より）

ＴＲ９完掘状態
（西より）

ＴＲ９調査前全景
（東より）

ＴＲ10調査前全景
（詰Ａ区より）

ＴＲ10完掘状態
（詰Ａ区より）

ＴＲ10完掘状態
（南より）

詰B区発掘調査風景

詰A区発掘調査風景

調 査 風 景

PL. 10

1

2

3

4

6

7

5

8

出土遺物

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第５集

チ シ 古 城 跡

高知西南地区大規模農道整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

1992・3

発 行　(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437－1
TEL　0888－64－0671

印 刷　川 北 印 刷 (株)

PDF作成：平成15(2003)年9月1日　カタオカ印刷